

平成 28 年 11 月 2 日

南の風 205

南部ミニバスケットボール連盟
会 長 藤原 敬一

204号の続きです。

キャンページ選手のように2m以上の相手を守るには、ペイントエリアで守ろうとしても遅いのです。しかもトップのポジションから入り、ペイントエリアのミドル近辺でポストをつくられてしまったら守りようがありません。やはりトランジション時から、(キャンページ選手が走っている時から)早目に身体を密着させて、フラストレーションを溜めさせ、ペイントエリアに向かわせないことが肝心です。また、常にダブルチームすることが必要です。纏わり付くように守りプレッシャーを掛け続けることが大事です。

また直接の手段ではないのですが、彼女の弱点を突くことも考えるべきでした。彼女はそんなに俊敏ではないので、ディフェンスにもどるまでに時間が掛かります。その隙に攻めきってしまうのです。実際2ピリではキャンページ選手が日本の速攻に付いて行けず、交代を余儀なくされた場面がありました。

要するに、1人で守るのではなく組織的、戦術的に守る必要がありました。

このようなディフェンスは、ミニバスでも十分使えるタクティクスになります。

- 3 リバウンド(特にディフェンスリバウンド)が取れなかったことが痛かったです。相手にシュートを打たれた時に、スクリーンアウトするのか、早めに跳ぶのかが徹底仕切れなかったようです。高さのあるキャンページ選手にゴール下でシュートを打たれてしまった場合は、スクリーンアウトも何もないのですが。基本的にはシュートされた場合は、相手オフェンスに2次攻撃をさせないように、しっかりスクリーンアウトするか、相手の出鼻をくじくように身体を当てて早く、ボールに跳びつくことが求められます。

映像で観てみると「魔の4ピリ」と思ってしまうのですが、実際やっている選手は全力でやっても、うまくいかなかったのでしょうか。しかし悔やまれるオーストラリア戦でした。

最後の話題についてです。これはオーストラリア戦に限ったことではありません。アカツキファイブのファーストブレイクについてです。予選リーグでも、敗れはしましたが、アメリカ戦でも日本の速攻は十分世界に通用しました。リバウンドや相手に得点された後のトランジションは見事という他ありませんでした。例を挙げます。渡嘉敷選手がディフェンスリバウンドを取ります。吉田選手につながります。ドリブルからのロングタッチダウンパスが通ればシュートです。だめなら逆サイドからのトレイルプレイです。これに本川選手のドライブインを絡めます。シンプルですが大変有効でした。

さてここからです。アカツキファイブのファーストブレイクは、どんな場合でも『吉田選手』にボールをつなぎます。例え前に走っている味方がいても、吉田選手(町田選手の場合も同じ)にパスします。なぜなら、吉田選手のビジョンの広さ、パスカ、ドリブル力は日本チームの『核』だからです。素早く安全にボールを前に進めエントリーするためには、吉田選手のガード力は欠くことができません。

しかし速攻の基本システムからすると一考の余地があるかもしれません。次号にします。